ランプの精

音寒琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ランプの精

【Ｎコード】
Ｎ５１４９Ｌ

【作者名】
音寒琴

【あらすじ】
現代に火の精ファイラの封印されているランプが受け継がれていて
見つけたのは、オタクファッションがいけてると思い込んでいる、
実は美形の、乙宮十夜。出会ったのはなんと銭湯！？
ラブコメ系、ほのぼの・・・を目指していたはずなのに・・。
シリアスにどんどん向ってます。。。

プロローグ

昔々世界には、まだ魔法や、精霊、科学では証明できないものがありました。

ですが、少しずつ、その事実は、薄れてきました。人間が変わり始めたからです。

人間の力でできないことはないと、傲慢になってきたのです。

魔法は伝えるのをやめればいつか忘れ去られてゆきます。

そして次の世代に、受け継がれることはなくなり、魔法は伝説になり始めました。

精霊たちは、そんな人間に、あきれ人間たちの世界を離れてゆきました。

世界は一つではないのです。人間たちがどんなにこの世界の支配者だと言っても、

都合の悪いものを、排除して残った弱いものを、支配下においてることでしかないのです。

世界が一つではないこと、昔は誰でも知っていたことだったのに、もう誰も知らない、魔法や精霊と同じに、忘れ去られて行きました。

でも、あったことはすべてなくなるわけではないのです。かけらがどこかに残っているのです。

魔法は、小さく受け継がれていましたし、世界が一つではないことや科学で証明できないことは、話として語り継がれていました。

精霊は、実は今でもいるのですよ。物に封印されている精霊・・たとえば、ランプの精・・とかね。

第一章　銭湯での事件１

（がらり、ぱさ）

「オヤジさ～ん、こんばんわー」

銭湯のゆと書かれた御馴染ののれんをぺらりとめくって

顔を出したのは、一人の青年だった。この男こそ、この話の主人公だ。

分厚いでっかいメガネをして、上はシャツに、チェックのどてら、

下は、着古したジーパン、しま●らで買ったと思われる、

汚いスニーカー、髪は、もう夜なのに、まだ寝癖がついている。

朝から、一度も梳かしていないのだろう。

顔はすすに少し汚れている。一言で言えば、ださいかなりださい。

手には風呂桶と、タオル、石鹸、プラスチックのアヒルだ。

「マルチャン三号」と言うらしい。おなじみの、銭湯スタイルだ。

「おう、十夜いらっしゃい。」

愛想よく笑いかけたのは、銭湯の主人の桑田慶介だ。

五十過ぎの元気なオヤジだ。

気さくで、いつも、ピンクのキューピーのどてらを羽織っている。

お気に入りらしい。どこから探してきたんだか・・。

桑田は、なんかよくわかない国の、骨董品や、工芸品、不思議な物を集めるのが趣味で、ときどき海外に出向いて自分の足で、買い集めている。ダガそのセンスも、かなり良くわからない。

そして、銭湯のいたるところに置いてあり、

その骨董品などを観賞しながら、お風呂に入ることができる。

（一部の人に）うれしい特典だ。

いやいらんだろ、という突っ込みは置いといて、話に戻る事にしよう。

乙宮は、どてらのポケットをゴソゴソと片手で探り、三百円を取り出した。

「まいど、おっ今日は、３３番だよ。」

と錆びたような、カンからロッカーのかぎをあさって、

ポンと投げて寄越した。

「３３番かラッキー、今日はいいことあるかも」

何を隠そう、乙宮は、３月３日生まれなのだ。だから、３３番が、出た時は、ラッキーだ。（乙宮の思い込みだが）なんかのくじさながらだ

てきとうにちゃかちゃか服を脱いで、メガネもはずした。

このメガネ実は伊達だ。（度が入ってないやつのこと）

憧れのオタクファッションのためへそくりをはたいて買ったのである。

いつも必ず身につけている、寝るときと、風呂のとき意外だが、

実は十夜は眼鏡をはずすと結構いけているのである。

目は、深い青色で、おじいさんはフランス人だ。

鼻はすっと通り、芸術なまでに整った顔をしている。

寝ぐせの付いた髪さえもそれが、何かの髪形のように見えてくる。

その辺のかっこつけてるやつを余裕でのすぐらいには、つまり美形なのである。

だが、オタクファッションをこよなく愛し、ひとよりちょっと（かなり）

好みが違う十夜は、まったくもって気づいていない。
眼鏡をはずせば、もてるだろうに、かわいそうな奴である。
ロッカーにポイッと服を放り込むとかぎを閉めた。
タオルは腰に巻く、これが銭湯流の、エチケットらしい。
もう一つの身体洗うようのタオルは、折りたたんで、頭の上に載せた
風呂との区切りの、ドアを開けると、ムアッとした熱気を感じた。
ドアを開けてすぐにあるのは、一メートルほどのモアイ像の、
置物である。いやでも一番気になるのは、その頭部である。
何かの間違いか、桑田の趣味だろうか？
レインボウな、アフロのかつらが、その頭部を飾っている。
そのアフロを撫でると、髪がフサフサになるとゆう噂だ・・。
それ以外にも、摩訶不思議な物が、無造作に置かれている。
何かが増えるのを密かに、楽しみにしている、乙宮だった。

第一章　銭湯での事件２

髪と身体を、ササッと洗うと、銭湯独特の、ちょっと熱めのお湯に
ジャボンと一気につかった。熱くて最初はちょっとヒリヒリもする
が、
慣れてくるととても、いい感じだ。一日の疲れが吹っ飛ぶ。
マルチャン３号を（プラアヒル）お湯に浮かべた。（浮きます）
（なごむ。。。）マルチャン３号をほや～と見つめつつ
少し浸かって、１心つくと、元さんの事を思い出しを探し始めた。
乙宮が探しているのは、蔵人元太御歳７０歳の、銭湯仲間だ。
人生経験が豊富で、いつも、お風呂に入っている時はおしゃべりする
（あぁ今日は、仕事がいつもより遅かったから、
時間かち合わなかったのかな。まあしょうがないか）
元さんも見付からないので、湯船の淵にヒジを載せ一曲歌ってみる。
「いっい湯だなぁ～はっはっはんいい湯っだぁな～るるるぅ」
頭のタオルとこの歌がベストマッチだ。
気持ち良く歌っていたら、肘に置物か何かがあたった。

倒れて無いかと、後ろを振り向くと、一番最初に目に入ったのは、
木で出来た。目が恐ろしく怖い、なんかにらまれているようにも感じる、
どっかの民族の工芸品の人形があった。
（おっおやじ、これはまた奇妙な物を・・・。）
でも肘があたったのは、これではなかったようで、
金属にあたった感じだったので、
見回していると、あたったものと思われるものを発見した。
「よかったぁ～壊れてねえ、セーフ。」
それは一つのランプだった。
まさにアラジンの魔法のランプに出てくるような形の、
銅のような物で出来た、ランプだった。細部をよく見ると、
とても細かく、細工が施してあった。読めない暗号のような文字も
所狭しと並んでおり、不思議な魅力がある。
（おやじもたまにはいいものも、探すものだな。）

もっとジックリと見ようと手にもつと、ずしっと重かった。

（なんか汚れてる）

ランプは、すすのようなもので汚れていて、乙宮は少し考えた後、

頭の上に載せてたタオルで拭いてみた。一回拭くと、

拭いた所がきらりと輝いた。銅のような色に見えていたのは、

すすのせいだったのか、どちらかといえば、金色に近く、

（これが金だったら凄いけど。まさかね～。しかしきれいだな。

おやじもちゃんと磨いてやればよかったのに・・。）

と思いつつ、もう一度拭いた。（きゅ）

（それにしても汚れが綺麗に落ちるな、

なんかちょっと前にスチームクリーナーがはやったよな、

湯気で汚れが浮きでてんのかな？）

もう一度拭こうとして、ふと一瞬手を止めた。

（アラジンの魔法のランプって、３度磨いたら

ランプの精が出てきて、三つの願いをかなえてくれるんだったな、

俺なら・・。）

上の空で考えながら、もう一度磨いた（きゅ）

大分綺麗になったかなっとランプに視線を戻した。

「よしよしきれいになったな。なんか輝いてるみたいだ。ん？
いやこれは、なんぼなんでも、輝きすぎじゃないか！？
ひっ光ってる！？」

第一章　銭湯での事件３

みるみるまに、ランプはその輝きを増してゆき、光り始めた。
眩しいほどになったかと思うと乙宮の手から離れて、
浮き上がった、ぐらぐらと何度か傾いたかと思うと、ランプの口から
煙のような物がぽぁとでてきた。するとあまりの驚きで固まった、
乙宮の手にコロンとランプが落ちてきた。
そのランプは、元の姿に戻り、そのかわり
その煙のような物は光りをおび、だんだん人のような形を作ってい
った。
十夜は、あまりのことに、ぽか～と口をあけてあほずらでその様子
を見ていた。
煙は最終的には、女の形になった。
ランプから出てきた女は、一言でいうと、人間離れした美女だった。
火のように赤く美しい髪は、見事にウエーブして肩に流れている。
ひとみは、炭のようにまっくろで、強さを感じさせ印象的で、
顔の造形は、もう芸術品といっていいほどに整っている。

（びっ美人さんだ・・。）

あ。うんそうなんだけどさぁ、もっと突っ込むとこない？十夜クン

十夜の視線が、顔から下がってきた、まあ男のサガ、スタイルの方も目に付く。

素晴らしいスタイルなのだが・・。

「なっなんで、タオル一枚なんだぁ！！！！」

あのはらりと来てはマジでヤバイ胸の上から

バスタオルを巻くとゆうアレだ。

「とゆうか、急に女のひとが出てきたとか、まっまずくないか！？」

乙宮は、ばしゃっとお湯から立つと、赤毛の美女を

隠すようにたち、周りを見渡した。

（あっあれ？だれもいない？遅くなったといえ、さっきまでざわざわしてたのに、

ここは銭湯だよな、そうだよここは銭湯。湯あたりしたんだ、のぼせて幻覚まで見えてるよ、あははうふふ）

乙宮が現実逃避をしていると、それを無情に壊すように、女が

話し掛けてきた。

「我が名は、「ファイラ」おぬしが我の封印をといたのか？」

後ろから聞えてきた声は美しく可憐なのに、

喋ってる言葉が似合わない。

（現実っ現実ぅですかぁ？？？）

心の中で誰かに問い掛けてから、

決死の覚悟で振り向くと、そのナイスバディーぐふっとなった。

乙宮は、彼女いない歴歳と一緒な、純情なヤツなのである。

「ファっファイラさんお願いですから普通のかっこに着がえて下さいぃ」

第一章　銭湯での事件４

ランプから出てきたこと総無視の必死の懇願だ。

鼻痔出して気絶の一歩手前なのである。脱衣所に行けば、

自分の服も貸す事も何とかできるし、どうにかなると判断した。

「ん？この時代ではこのかっこが普通だと思っておったのだが、

ちがうのか？みなこのようなかっこばかりしておるゆえ、

わかった着替える事にしよう。この人形が着てる・・」

何かぶつぶつ話しているみたいだがすこしホッとしたところで

「とりあえず誰もいないみたいなんで、脱衣所のほうへ・・・。」

とはなしていると、ぱちんと音がしたので、振り向くと、

あの凄い目つきをした、人形とそっくりの服を着た、ファイラがいた。

「これでよいのだろう？」

人形が着てたときはあんまりわかんなかったが、結構可愛い服である

赤くて金色の模様が裾に書いてあるワンピースだった。

ファイラにとても似合っている。

乙宮は、ポッカリと口を空け唖然とした。

「どっからワンピースが？あってゆうか、何故ランプの中から！？」

そうそこなのである、一番突っ込むべき場所は、

「とっとりあえず、湯船から上がって話しましょう。」

ファイラのお湯に浸かりそうな裾を見て、風呂から上がる事にした。

忘れずにマルチャン3号もお湯から取った。

「ふむそうしよう。」

ファイラも賛成したので、湯船からあがりもう一度誰もいないか

確認してから、厳かにプラスチック製の、椅子を勧めた。

ただのプライスが、ファイラが座るとなんか王座にも見えてくる不

思議さである。

「それで・・・なんでランプから？てゆうかどうやって？」

やっと確信部分の質問である。

「われはファイラ、ランプに封印されし、火の精だ。

この世に出たのは、３００年ぶりといったところか、大体だがな。」

「３００年ぶり！！あれ？でも、ランプの精じゃないんですか？」

「ん？ランプの精霊などいたらおかしいであろう。」

「あぁよく考えてみるとおかしいですよねぇ。」

まあ火の精でも、十分に現実離れしているが・・・。

「ちょっとそのランプを貸してくれるか？」

「えぁ、はい。」

ファイラに向かってポーンと投げた。

もうすっかり桑田のものとゆうことを忘れている、ぞんざいな扱いである。

それを受け取ると自分のことを説明し始めた。

「私は暇を持て余しておった・・・。

そして、自分の力を過信し、禁忌と呼ばれていた、人間界にきた。

そこで、私は、迂闊にも魔法使いに騙されてランプに封印されてしまったとゆうわけだ。

この模様は、私を封印し、従わせるためのもの、

だがこれでも、聖なるものじゃ、完璧には封印も従わせることもできなくてな

三回ランプを磨いたらでてきて一人に付き3つの願いを叶わせる、そうゆう契約でわれを縛ったのじゃ。」

ファイラは、軽い口調で言った。だがきっとこれにはつらい過去もあったはずだ。

禁忌を犯した精霊を、助けてくれる仲間はいないはずだし、なんといっても

「・・人間が憎くないんですか？・・・。」

僕なら自分を縛って、従わせようとした人間を許せないはずだし、それを利用してきた人間も許せないはずだ。

「最初は憎くて、恨みもした、だが長い時の中その恨みも薄れてくる。

利用した人間も恨めないのだよ、知っておるか？

人間の中の炎を・・。われは、それを見て、不覚にも感動してしまった。

精霊が作ったきれいな炎ではない、でも、それは、人間の中の、汚さも、美しさも、すべてを糧とし、荒々しく燃えている。

生命の炎じゃ。無駄話が多かったな・・。

じゃあ契約どうりおぬしの3つの願いをかなえてやろう。」
ランプをっきゅっきゅと磨きながらファイラが言った。
「・・・あのですね・・人間界にはランプの精ってゆうお話があって
その話も、ランプを3度磨くと精霊が出てきて、三つの願いをかな
えてくれるんですよ・・・。」
十夜が話し始めたので願いかとファイラが、顔をあげた。
「ふむ・・それは興味深い、私が昔出てきたときの話が、
物語として、受け継がれてきていたのだな。」
でもその十夜の真剣そうな顔に思わず息をのんだ。
「で、何を願うかはずっと決めていたんです・・」
真剣な様子に少しうろたえつつも、ファイラは、先を促した。

第一章　銭湯での事件５

「僕はファイラさんを、解放することを願いいます。」

乙宮は、濃い青色の瞳で、ファイラの深い黒色の瞳を覗き込んでいった。

３０秒ほど、見つめ合って沈黙が流れた。

そして、ファイラが、その沈黙を破った。

「それは・・お前と結婚するということか？。」

「はいぃ！？けっ結婚！！！！なぜどうして？？？」

乙宮は、驚きすぎてイスからずり落ちた。

「精霊が、人間界にとどまるためには、何かと契約しなければならない。

我がここに来た時は、われの分身紅蓮華の実と契約した。

魔術師の時は、魔術師が契約者となった。

このランプもある意味では、われをこちらにとどまらせるものである。

精霊界には、戻ることはできない。

必然的に、次の契約者は、お主となる。」

「わかりました・・だけどそれとこれがなぜ結婚になるんですか？」

話を聞いてちょっと、落ち着いた乙宮は、椅子に座りなおした。

ファイラが、少し居心地悪そうに、顔を赤らめて、戸惑ってから、一気にはなした。

「その契約というのが、その者とキスをせねばならんのだ。

キスをする者は結婚する者だと決まっておる。」

ちょっと乙宮はあっけにとられてから、ちょっと笑いながらいった。

「キス？！あぁそうゆうことかでも、僕結婚してませんし、恋人でもないけど

お爺ちゃんの実家に行くと幼馴染や、おばあちゃんにキスしますよ。

大丈夫です、それでファイラさんが自由になるならキスを友情のあかしとか思えばいいんですよ。

僕と結婚しなくても大丈夫です！！」

忘れがちだが、乙宮は、お爺ちゃんがフランス人である。

日本人は、友情の証でキスはしません。

「な！？そうなのか！！時代はそんなに変わったのか！！」

「ファイラさん、僕は、ファイラさんを解放することを願います。」
「本当にいいのか？そんな願いで・・・。
われを解放するなど、結婚もしないのならおぬしに得はないぞ。」
「僕が決めたことです。かなえてください。」
乙宮は、ファイラの頬に手をあてた。
「目をつむってください。」
ファイラはそっと目を閉じた。そして呪文をとなえはじめた。
「ベルスランドレーボ、契約に基づき解放せしものの願いをかなえよ。」
ファイラが光を帯びはじめた。
ファイラの唇にそっと自分の唇を押しあてた。
ゆっくり唇が触れたかと思うと、すぐに離れた。
これで終わりかと、ファイラが目を開けかけ、喋ろうとすると、
また唇が落ちてきた。さっきよりも深くかいばむように

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5149l/

ランプの精

2010年10月10日19時57分発行